

祖父母の歴史

祖母マツノは戦前の日本で、「日英同時通訳兼タイピスト」のという技能を持って働いた後、岩国出身の祖父の嫁となって、母を含む3人の子供を産みました。その後ハワイに弟、友人や親戚を残しつつ、日本で第2次世界大戦を経験し、戦後は東京で子供を育て、祖父が亡くなった後もアメリカには帰らず、日本に骨を埋めた女性です。明治、大正、昭和、平成を生きた人でした。



結婚前の祖母マツノ



ハワイで友人と

ここに、4枚の写真があります。上の2枚は祖母マツノの結婚前、モダンガールらしい青春時代の写真です。祖母の両親は博多からハワイ島のヒロに新しい生活の場を求めて移民し、和菓子屋さんをしていました。祖母はその看板娘だったそうですが、高校を卒業する時になって、親の健康状態が悪くなり、一緒に博多に帰国しなければならなくなりました。

下の2点は戦後の住居、渋谷の家で撮影された写真です。木造日本家屋の母屋と離れ、それに洋館があり、はじめは祖母のお母さんも一緒に住んでいました。私の両親は、敷地内に2階建てのうちを建て、晩年の祖父母と一緒に過ごしました。私の中高、大学時代です。祖母は隣のうちから遊びに行くと、パンケーキの焼き方や色鮮やかなジェロの作り方を教えてくれたり、英語の宿題を手伝ってくれたりしました。



祖母とお母さんのりえさん（渋谷）



祖母の着物姿

お見合い結婚が主流だった当時の日本で、弁護士でもあり、起業家でもある祖父は日系アメリカ人の祖母と恋愛結婚しました。生活は、そこそこ良くて、お客を招く大玄関へ続く道は、完璧な敷石といつもきれいに手入れされた植木があり、芝生も丁寧に刈られていました。住み込みのお手伝いさんがいて、子供3人の世話も一人でしていた訳ではありません。祖母は、妻として、大変大切にされたと思いますが、戦争時には、家族と敵同士となり、戦後も昔のよ

うに第一線で働くこともせず、故郷のハワイを訪れることもなく、着物を着て「日本人の奥様らしく」過ごした祖母の苦勞は、想像を超えるものではなかったろうか、と今の私には思えます。

そして、どこかにできた傷跡は、私にはアルコール中毒症になってしまった母にも、家庭や子供を持つことができなかつた私にも影響を及ぼしているかもしれません。私の中で、つけなければならない折り合いは、極めて個人的なことではありますが、それをしなくては、祖母も、母も、私も、この記憶の層から逃れることができないのではないか、と思っています。私が美術を行うことは、あらゆる記憶を、死ぬ前に、ひとまとまりの美しいものとして手放したい、と望んでいるからではないか、と最近感じています。そんなことを思いながら、かつて、祖母や祖父、幼い母と、同じ場所ですれ違ったかもしれない都市を訪ねて、ポツポツと歩きながら、道端で小石を拾い、樹木の肌に和紙をあて、木炭で擦り取りながら旅をしてきました。



祖母が母を生んだ神戸の芦屋（海岸）近くの樹拓（神戸）



祖父のうちに多くの作品が飾ってあった「錦帯橋」周辺の樹拓と旧制岩国中学の校庭で拾った小石（山口）



祖母の実家近くの住吉神社とお墓のあったお寺近く（福岡）